

## 「ルツとダビデ」(ルツ四・一〜一七)

### 1 旧約と説教

今日から説教の聖書箇所は旧約聖書になります。主としてサムエル記(上下)を取り上げて、ダビデの生涯を、ご一緒に学んでみたいと思います。予定は一月の終わりまでですが、七月二八日(第四週)から八月一日(第三週)まで、四週間は例年のようにキリスト教学校の日、あるいは平和聖日として、別メニューになります。サムエル記ではなくなります。

旧約聖書は特定の箇所を除いて一般に私どもにはなじみの薄いものです。教会の八十年史を見ても、創世記、詩編はそれなりに取り上げられています。そのほかは非常に少ない。これは私どもの教会だけでなく、日本の教会の一般的傾向ではないかと思えます。私自身も、これまで、取り組むことは多くはなかった。ですから自分でもやりきれるかなと不安な思いがないわけではないのですが、やらなければよかつたとならないように、後悔説教にならないように願っているところです。お分かりにならないところがあつたらどうぞいつでも質問してください。少しでも聖書理解が深まることを願っています。

旧約聖書が大切なことは、たとえばイエスが読んでいたのが、弟子たちが読んでいたのが旧約聖書だつたという一事をもつても、明らかです。もちろん旧約という言葉はなかつたわけで、たんに聖書ですが。イエスに見えていた世界、弟子たちに見えていた世界、聖書から受けていた感覚は、私どもとはよほど違っていただろうと思えます。ですからそれを、私どもも、実感してみたいというのが、旧約を取り上げる一つの理由です。それとともに、旧約聖書も私どもにとつて、神の言葉であることに違いはありません。新約聖書とともに、またそれをふまえて、旧約を、いまここで神の言葉としても読んでみたい、こうしたことが、つまりたんに過去のこととしてではなく現在の言葉、現在の私どもに対する言葉として読んでみたいということが、旧約に取り組むに当たつての気持ちです。

それにしてもなぜいまダビデかという問いもあるかも知れません。その理由はとくにあるわけではありません。ただ毎週木曜日の聖書を読む会で、昨年皆さんと一緒にサムエル記を読むことがあり、そこで神を信じて生きるとはどういうことなのか、学ばされることが多かつたということがあります。片やイスラエルの王であり、英雄です。私どもとは比較にならない。しかし聖書は、そうした偉人を描くときでも、不都合なことでも隠さない。弱さを隠さない。罪を隠さない。神の前の一人の人間を描いています。その上で、たましいの悔いせずおれた者(詩三四・一八)の救いを証しています。そこに今も私どもが学ぶに値する、たんに昔の人間ではない、普通の人間の在り方が示されているのです。私どももまたみな同じく神の前に歩んでいるのですから。

ダビデはイスラエルの名君です。ユダ族エッサイの末の子として生まれた彼は、預言者サムエルに見いだされて、サウルの後を継ぎ二代目の王となります。紀元前一〇〇〇年のことです。四〇年にわたりエルサレムでイスラエルを治め、ペリシテ人をは

じめ、周辺の諸民族を征服し、イスラエルに歴史上最大の版図をもたらします。彼はまた文学の才能に恵まれていて、詩編の多くはダビデの作とされています。このダビデをイスラエルの人々は、神に信頼し服従してよき統治をおこなった、いわば理想の王として仰ぎ見つつ、メシア（救い主）は彼の子孫として生まれると信じていたので、このダビデのことを、サムエル記、取り分け、下が、詳しく伝えていきます。

## 2 神の計らい

今日はルツ記を取り上げ、サムエル記のダビデ物語の序章とします。というもののルツを曾祖母（ひいおばあさん）としてダビデは生まれたからです。

ルツ記はルツという一人の異邦の（ユダヤ人でない）女性、モアブの女性がけなげに生きた物語です。四章を今日のテキストとしますが、全体を語らないでこの章を説明することができませんので、まずは私の言葉で、ここまでのことを短く申し上げておきます。

時代はイスラエルが王制をしく前です。士師と呼ばれるカリスマ指導者が時々に出て治めていた頃。内外に戦争がたえず、偶像礼拝も盛んにおこなわれていた、過渡期の不安定な時代です。

ある家族が飢饉を逃れてユダのベツレヘムからモアブの野に移り住みます。一家の主人の名はエリメレク、その妻はナオミです。二人の息子でいて、マフロンとキロンといます。

エリメレクはそこで死に、ナオミと二人の息子が残されます。彼らは成長しモアブの女を妻とします。妻の名前は、一人はオルパ、もう一人がルツです。十年たつて、二人の息子も死に、ナオミと二人の嫁オルパとルツ、女三人が残されます。子供はいなかったようです。

その頃故郷ユダのベツレヘムの飢饉も終わったと伝えられ、ナオミはユダに戻る決心をします。二人の嫁もついていきます。しかし途中ナオミは、二人の嫁に、ついでこないで自分の国に帰り、そこで幸せになるようにと促すのです。オルパもルツも離れようとはしませんが、ナオミの強い思いにオルパは別れて行きます。それでもルツは離れようとせず、二人はベツレヘムに戻ってきます。ナオミが帰ってきたことで町中が「どよめいた」（一・一九）とありますが、ルツはいたとして、一人になって帰ってきたナオミに同情が集まります。ナオミとは「快い」という意味のようですが（一・二〇）、彼女は自分をマラ、苦いと呼んでほしいといい、神はわたしを不幸に陥れたといって嘆きます。

ナオミは気力もなくしてしまっていたように見えます。けれどもルツはそうではなかった。ここで姑と一緒に生活していかなければならない。彼女は、だれか厚意を示してくれる人がいて、落ち穂を拾わせてくれるかも知れないといって、働きに出かけます。それが彼女たちの運命を変えるのです。

それは摂理といたらよいのでしょうか。後から考えれば、人知を超えた神の計らいです。ルツが「たまたま」（二・三）行った畑は、じつはボアズという有力者の所有する畑地で、彼はナオミの夫、死んだエリメレク一族の「親戚の人」であったとい

うのです。「親戚の人」という言葉が第四章にもくり返し出てきますが、これは特別の言葉です。もとの言葉でゴーエールといいます。イスラエルの古くからの掟で、親族は同じ氏族に属する人の現状を維持する義務を負うというのがあります（レビ二五・二三）。たとえば親族に土地を手放さざるをえなくなった人がいた場合、その土地は神から与えられたものであって、無くしてはならない、そこで親族が買い取る、あるいは買い戻して土地を守らなければならないのです。身売りをしたイスラエル人の買い戻しという意味でも使われます。一番近い親戚の人が義務を負う筆頭者です。いろいろの訳があります。文語訳は「贖業人」（あがないびと）、口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳は「親戚の人」。そのほか「買い戻す人」とか、「贖う人」「贖い手」などの訳があります。

ナオミはルツから、落ち穂拾いさせてくれる寛大な人がボアズだと聞いて、ボアズにルツを嫁がせようとします。じっさいナオミのただ一つの心配は、ここまで忠実についてきてくれた嫁、モアブの女ルツの行く末でした。ボアズもまたルツを気に入る、ゴーエールとしての役割を果たそうとするのです（三章）。

ところがボアズは、じつは買い戻す義務・資格のある親戚の一人ではあっても、一番近いそれではなかった。一番近い親戚が義務を放棄しないかぎり、自分に贖う資格は回ってこない。ボアズは賭に出たといってもいいと私は思います。裁判で、民事です、決めようとした。賭けに出たといつたのは、一番近い親戚の人が、もし引き受けるといったら、それで終わり、土地もルツも、自分が買い戻すことはできないからです。その「交渉」が、「町の門」の広場で、長老だけでなくすべての民を前に行われます。それが今日の箇所、ルツ記第四章です。

### 3 その御翼のもとに

ボアズの思いがかなった場面、少し長くなりますが、緊張をはらんだ箇所をもう一度読んでみましょう。

ボアズはその親戚の人に言った。「モアブの野から帰って来たナオミが、わたしたちの一族エリメレクの所有する畑地を手放そうとしています。それでわたしの考えをお耳に入れたいと思っただけです。もしあなたに責任を果たすおつもりがあるのでしたら、この裁きの座にいる人々と民の長老たちの前で買い取ってください。もし責任を果たせないのでしたら、わたしにそう言うてください。それならわたしを考えます。責任を負っている人はあなたのほかになく、わたしはその次の者ですから」。「それではわたしがその責任を果たしましょう」と彼が言うと、ボアズは続けた。「あなたがナオミの手から畑地を買い取るときには、亡くなった息子の妻であるモアブの夫人ルツも引き取らなければなりません。故人の名をその嗣業の土地に再興するためです」。すると親戚の人は言った。「そこまで責任を負うことは、わたしにはできかねます。それではわたしの嗣業を損なうことになります。親族としてわたしが果たすべき責任をあなたが果たしてくださいませんか。そこまで責任を負うことは、わたしにはできかねます」（三〜六節）。

これによると一番近い親戚は経済的な理由で断っています。会話の中でボアズがルツの引き取りのことを後出しし、結果として、この一番近い親戚は、経済的負担のことを、ことさらに心配したようです。履き物を脱いで相手に渡すという当時の習慣にしたがって交渉は成立します。ボアズはまさに贖い手、ゴーエールとして、困窮中のナオミとルツを救ったのです。ボアズはルツをめとり、イスラエルの神の恵みによって子供が与えられます。

少し前ナオミがルツをとめないモアブの地から帰ってきたとき、その憐れな姿に騒ぎ立ち、後ろ指を指した「女たち」（一・一九）は、いまや「主をたたえよ」、主はあなたを見捨てることになかったといって祝福し、彼女の前途を祈ります。ナオミに改めてスポットライトが当たります。しかしルツについては、その後のことは何も書いてありません。異邦の女でありながら、イスラエルの掟に忠実に従い、姑ナオミを最後までささえて、おそらく何か特別華やかな人生を送ったのではなく、むしろ目立たない、静かな生活を送ったのだと思います。

ルツ記を読んで、二つの聖句を思い起こします。一つはルツ記にある言葉、もう一つは新約聖書からです。

どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イエスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れてきたあなたに十分報いてくださるように（二・一二）  
この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができます（ヘブライ七・二五）。

前者は、ボアズがルツに語りかけた言葉です。ここにルツへの労いのすべてが込められているとよいと思います。ナオミを助けて、イエスラエルの神の御翼のもとに逃れて来たあなたに神の豊かな報いがあるように、と。後者の「この方」はキリストのことです。キリストもまた私どもがどのような事情にあっても、キリストによって神に近づく者を救い、贖い、守ってくださいなのです。この御翼のもとに生きたのがルツでした。

ルツはダビデから見ても三代も前の人です。どういう先祖がいたか、私どもはふう名前ぐらいしか知らない。ましてルツが、自分を經由して、ダビデ王が誕生するなど知る由もないのです。状況は私どももそれに近い。これまでどうだったか、これからどうなるか、考えることは必要ですが、それに囚われることなく、思い煩うことなく、ルツの如く、現在を、いま与えられた所で、与えられた時の中で、与えられた条件の中で、しかし忠実に生きる、それが私どもに求められていることです。御翼のもとに逃れ行き、日々の務めを果たしながら、歩んでまいりましょう。

（二〇一九・六・一六）